



2

0054625-000

特 252-28

島の伝説

三宅勝太郎・著

琴弾地海水浴場

昭和 11

AID

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

持252  
28



島 傳 之 說

三宅勝太郎 著



## はしがき

聖島直島。ゆかし名の待島。

此の聖島に秘められた幾多の傳説。

正史に近きもの、碑文に秋の夜長の老人の口より傳はりしもの等文化の進展は此のうるはしい、郷土人の心の糧である傳説を減びさしつゝありはしないか？

近年國立公園の中心となり、夏季は海水浴場とし、キャンプの好敵地として幾多の來遊者を迎へるやうになり、郷土傳説の愛好家も多々あることを耳にしまして研究淺き私があへて一冊の單行本としました。讀後の感想、御叱言を戴きますれば幸甚と存じます

「傳説の直島」目次

直島地圖	.....	
島名の起原	.....	
雜		
やに桃	.....	二
割り石	.....	六
犬神さんの由來	.....	一〇
五人そはへ	.....	一三
地藏山及桃山の由來	.....	一七
敬法院（南部恐山の化物退治）	.....	二一
蚊屋のいらぬ家	.....	三〇
京の女郎の化物	.....	三三
朝鮮岩	.....	三九

# 説傳のマシホナ

著 郎 太 勝 宅 三

大君の御舟を此に泊り浦

秋風さむく蘆の花ちる

法蓮山の一おろし	四一
火つかずの燈籠	四五
大樟	四九
きびしようがたけ	五二
琴弾地の濱(海水浴場)	五五
素麵川	五九
観音の井	六二
装幀並に繪	
附 直島民謡	
水谷弾一	



## 當島地名由來

當島は天地開闢の昔日より人が住んでゐた。

島名を加茂女島又加茂津久島と呼び又長島と言つていたことが日記にのつてゐる。

人皇第十四世仲哀天皇の御時、神功皇后三韓を御征伐なされた。此の時吉備の軍船の勢揃を當島の西岸にてなされた。

皇后船を待ち給ひし故當民は待島(眞知島)と呼ぶやうになつた。

軍船の勢揃があつてから、遙に歲月を徑て

人皇第七十五世 崇徳新院世の乱れに遭ひ給ふて、都を後に此の荒磯に潜幸し給へり。

然るに郡臣の多くは、物の曲直を辨ぜないで、舊をすて新に奔り、盛なるに従ひ衰ふるに反いて、皆新帝に隨身する者少し然るに當民は眞心を持つておつかへしたので、五氏に姓を給ひ島の名を直島と改められた。

「大君の御舟を此に泊り浦

秋風さむく蘆の花ちる」

- 1、泊が浦……保元年中松山に御殿の出来るまで當島東岸の風光明眉の地に假屋を建てられ御住み給ふ、その地を泊か浦といふ。

- 2、お 籠……………五部の大藏經をうめしと傳ふ。
- 3、硯の水……………五部の大藏經を御書の際御使用なされし水。
- 4、姫 宮……………崇徳院の御子として言ひ傳ふ姫宮を御祭りせり。
- 5、御子 持……………御子を御腹に持ちし際御殿ありし場所。
- 6、潮 掛 岩……………應神天皇岩に潮をおかけ興じたと傳ふ岩。
- 7、首 塚……………平家の末路をとむらふ塚。
- 8、牛 ヶ 首……………管公來島の際は島の上よりながめて潮の込める様をみて「あゝ美き潮込かな」と言はれて以來潮込島といつていたがいつしか牛が首といふやうになつた。
- 9、駒 が 池……………竹内宿禰應神天皇の駒の足を洗はれた池。
- 10、いとまが浦……………崇徳上皇とおいとまをした浦。

## や に 桃

「今年もどうしたことだらう、桃にやにが出た？」

「今年で三年目じゃ。」

村人が三人よると、此の話で花を咲かせてゐました。きつと何かのたゞりだらうといふことが村人の次ぎ

から次へ言ひ廣がりました。

「さう／＼、今から三年前の、丁度桃の實が美しく熟す時だつた。一人のみすほらしい坊様が來てからだ」などと物知り顔に、村中をふれ歩く人さへも出て來ました。

又或る人が、

「今は死んでゐないが、〇〇婆さんが桃の草取りをしてゐる時一人の坊さんが桃を下さいと言つたが、やらなかつたと言ふことでないか。」

と言へば、

「それ／＼、丁度それから三年目だ！」

其の後村人は、弘法大師さまの御ためしにあつたのだといふやうに言ひ傳へ出しました。

今か千年程昔の弘二年中山の木々の緑も濃く、小鳥も木蔭を慕ふ時、一人のたび僧、黒ずんだ行脚笠、色あせた衣、右手にりんを持ち、左手に杖その杖も何處で求めたか、ひよ／＼の六角杖でした。

みすほらしいその僧は、家々を廻り惠を求めてゐました。

身にまとふものはみすほらしいけれど、何處となくおかしがたい僧でした。家々の前に立つて、

チリリン！

チリリン！

と打ちならすりんの音は壯嚴に、俗人の胸にくひ入るやうにひびきました。

此の僧が或家の前に立つた時、その妻らしい婦人がみすほらしい僧を見て、



あゝ、可愛相な御坊様、よる年なみにお一人で、此の暑い日中に、氣の毒だと思つたのか、

「あのー、旅の御坊様、立寄つてお休みになり、今少し涼くなつてからお廻りになられては。」  
といひました。けれども旅僧は微笑しながら、軽く頭を下げて、次の門口に行きました。

又或る家では五年もの長い間大病をやんで、見る目も恐ろしくやせおとろへ、臨終は今か今かと、死を待つてゐるやうな病人が、夢からさめたやうに、

「あゝお母様。あのりんの音をお聞きなさい。何ぞか有難いやうな氣がします。」

此の時みすほらしい僧は、その病人の家の前に立つてりんをならしてゐたのです。

母は息子の聲に、耳をすまして聞けば、たしかに物を求める遍路のりんの音でしたが、何だか息子の言つたやうに有難い氣がしました。

「ほんたうに聞えます。何か進ませませう。此の炎天にお氣毒な。」

と一握りの米を持つて門口に出ました。そこにはりんの音にひきかへ、みすほらしい旅僧が立つてゐます。一握の米を手渡すと僧は有難く受取つて、立ち去らうとしましたが、何思つたか後をふりむいて、

「あの失禮ですが、これは有難いお守ですから、病人にいたゞかせなさい。」

と言つて一つのお守を老母に渡すと、後をも見ずにすたすたと立ち去りました。

其の日の夕方、少しも波れた色の見えぬけ高い旅僧は、脚を積浦の方へむけました。

夏の長い日も西山に沈まんとしてゐます。峠の中腹まで來た時、

「あゝ、加茂女島の人達は親切で情け深い人ばかりだ。」

と、濁語をいひながら、南の山を見ますと、一人の老女がかひくくしく、鍬を持つて日の入るのにも氣をとられないで、桃の木の下で草を取つてゐるのが目につきました。

此の様を見た僧は何思つたか、

「よし……今日が一番終の心だめしだ。」

とつぶやいて笠に手をかけ、

「おばあさんー、私どうものぞが渴いてこまつてゐます。其の桃を一つだけ下さいませんか？」

と、大きな聲で呼びました。

老女は鍬うつ手を休めて、聲の方を見ますと、いやしげな遍路僧が立つてゐます。

老女は「なあんだ。」と思ひながら、日の暮れかゝつた事に氣がついて、ちぎつてゐた桃をさけて歸りかけました。

旅僧は再び同じく呼びましたが、老女はうるさそうに、僧の方も見ないで、

「此の桃は近年、やにが出て喰へないんじや。」

と、すた／＼と歸つてしたひました。

後にのこされた僧はためいきをついて、

「可愛相な老女よ、貴女一人の爲に、心のよい島人達にはすまないが、來年からは、本當にやにが出てたべられないよ。」

と言つて何處へか立去りました。



大老師婆に桃を求む

六

老女はみすほらしい僧が、誰であるかは夢にも知りません。其の翌年の春が訪れた。美しい桃の花は咲いたけれど、可愛らしい桃の實はなつたけれど、實の熟す時が来た時、桃にはやにが澤山出て、一つとして、たべられるのはありませんでした。今に直島にはよい桃が出来ません。

### 割り石

日本の基定めし人皇第一代神武天皇九州の民草を、そよ風になびく青草の如く御平定なされて日、向の國大淀川の川口より御船にて、瀬戸の海を縦断して、大和

の國へ向はせ給ふ事となりました。

港を出た軍船は神日本彦尊（神武天皇）を先頭に、参々伍々追風にまかして目的の大和國へ……東に朝日を迎へ西の山に夕陽を送る事幾日、されど尊を初め奉り従者達の元氣は日増に増すばかりであります。

出發後幾日かを過ぎた或る日、何時もの如く朝日は東天に輝いた。丁度日の本の前途を祝福するかのやうに、尊の御目的貫徹の前兆のやうに！

尊の御顔朝日にははへて何時もになく尊く拜せられた。

此の時何處からか、朝日に銀翼をかざやかに一羽の白鳥が、御先頭に進む尊の御乗船の御船の帆柱に來てとまつた。

尊を初め奉り、従者は此の一出來事を何と判断しましたか？

後尾から續行してゐた軍船の一人が、

「尊の意志貫徹萬歳！」

何たる痛快な男叫び、續いて起る萬歳の聲、海神の耳もさげんばかしであつた。

萬歳の叫びを帆柱の白鳥は微笑かの如く二三頭を軽く動かし靜かに帆柱をたち、道案内でもするかの様に尊の船の先をとぶ。

船中には祝の酒か此處彼處に汲みかはされた。

肴は先行する白鳥。

七

御船が加茂女鳥（直島）の西岸に來られた時夕陽は大槌と小槌の間に没して、海上は墨繪の如くぼんやりとなつて來た。

「停船！」

尊の御船の從者が叫ぶ。

第一、第二の船の順に島蔭に近づいていかりを海に入れた。

夕飯炊く煙は暗の中に赤々とうつる。

みとまの下に一夜の露をしのがせ給ひし尊は、何思はれしか何時もになく朝早く床を立たれた。從者も不審をいだきながら續いて床を出た。

尊は海水にて口をすすぎ身を清められて、

「我考ふることあり。此の小島に上陸せん。」

と申された。從者は尊の命によつて御船を島の濱に着けた。

濱に御上陸なされた尊は草をわけ木をわけ給ひながら山の頂上に御上りになつた。

朝日は東の山の端にパツと輝いた。尊はしばし四方の景色を御觀になつてゐたが、ふと思ひ出されたやうに歩ませ給ひ、近くにあつた大岩石の側まで行かれた。

岩石の前にて直立不動めいも何か心の中で祈願せられてゐたが御目を御開きになつて、山を下らせ給ひ濱邊にて再び身を清め御衣を着替へさせ給ふて、岩石の見える所まで上られた。

二十間餘ほど山上の岩石を直視せられて、御腰の劍をぬかせ右の手に持ち給ひ、

「吾日の本を開闢せんこと願望成就天神地祇感納あれ」

と、右の手の御劍をはつしと岩に御投げになられた。ねらいたがはず劍は岩に、不思議尊のなげ給ひし劍の爲に大岩石は、見事願望通り、パツと二つに割れた。

濱邊に並ぶる從者聲をそろへて喜ぶ、尊もお喜びのあまり、

岩の割れしを諱に加へ「神日本磐余彦尊と稱す。」と申された。

重なる吉事に御男みなされて、小島の名を揚島と宛付け給ふて大和の國へ御出發なされた。

其の後劍岩山にあつて數多の星霜を経て弘仁年中、弘法大師當島へ渡られた時、彼の劍石の由來を島民より聞かれ、その岩を神に祭り山の名を篠山と名付け、劍石を篠山大聖大權現と崇め奉り、左の一首をのこされた。

我たのむ人の心の直ならば

深く守な名をいあげしま

と詠まれた。

幾千年はふれども、永久に此の物語は消えぬでせう。

## 犬神さんの由來

八才位の子供が、道の真中で一人泣いてゐる。  
其の子の父、のらから歸つて来て、

「どしたんじや？吉！」

吉は父の言葉に元氣を得てなきじやくりをしながら犬にかまれたと左手を出し、

「又、黒がわいが芋を持つてゐたら、かみついて取つたんじや。」

黒と聞いた父の顔面にはかに變つた。

「くそ……又あの黒めが。」

黒といふのは、野良犬の通稱である。

此の黒はとても荒ぼくて、人を見たらかみつく、鶏を盗む、留守宅へ侵入してあばれる。手におへない犬であつた。

或村休みの日でした。大勢の村人が寄り集つて、酒をのんでゐた時のことである。

話題は何時の間にか常々反感を持つてゐる黒へ寄り集つた。

「常！あの黒のやつまいらすか！」

「うん。あいつは箸にも棒にもかゝらんやつじや。」

「やつてしまへ、昨日も虎がかまれたといふじやないか。」

酒のため心がすさんでゐる村人は、黒を征伐することに一決してしまつた。

知らぬが佛、黒は何時ものやうに新潟部落の方へ出て來た。

村はずれの土の上においしさうな肉が澤山落ちてゐる。

村民の計畫とは露知らず、

「これは御馳走。」

と、思ひながらも用心して喰つてゐたが、おいしいものだから何時の間にか喰ふ事に夢中になつてしまつた。家蔭で此の有様を注視してゐた村人は、今か今かと、黒のわなにかゝることを、心待ちに待つてゐる。

一足、二足、前へ、前へ。

「しまつた!!。」

と、思つたしんゆ間黒は村民の作つた深い落とし穴の中へ落ち込んでしまつた。

「ワン！、ワン!!、ワン!!!。」

と、力一ばいほへたけれども援助者は一人としてない。

それのみか、此の時、したりとばかり家かけから、七八人の荒男が、手に手にこん棒を持つて出て来て、

黒の上から力まかせになぐつた。

いかに力あり、智恵ある黒も、身体谷まつて、衰れた最後を穴の中でとげた。

そのことがあつてから一週間後、熊が變な病氣になつた。虎も助も同じ病氣になつた。

醫者の診断を受けても、病原がはつきりしない。勿論薬の効果も皆無と言つてよい。同村内だけに日一日と同じやうな病人が打續いて發生する。村人の恐怖はつゝのるばかりである。

此の時、宮之浦に、宮田善右衛門といふ祈禱師が居た。

此の話聞いて一通りでないと、さつそく神に祈り、御神意を聞きました。神様のおつげによつて犬のたゞりであることがわかつた。

最速新瀉部落に行つて病氣の出來た由を話したところ、村人は誰恐縮するばかりでした。

善左衛門は村民に、

「そこで、皆の衆の病氣を治すには殺した犬を神さまとして祭ることです。それにし

ても、伏見のお稻荷さんへ行つて格をとらねばなりません。

幸わたしも一度伏見へお詣りをお思つてゐます故、その格はわしがもらつて來てあげやう。」

と言へば、村民は一も二もなく、宮田氏に萬事よろしく依頼した。

宮田氏はすぐ宅へ引きかへし、旅支度を整へ、山城の國伏見の稻荷さんへと御詣した。

伏見で、犬の靈を神の仲間にしていただき、厨子に犬の靈を入れて持ち歸り、部落の後の山へお祭した。

其の後多くの病名不名の不思議な病人は次ぎ次ぎと虚のやうに全治してしまつた。それから村人はの靈を氏神として朝夕御祭するやうになつた。重病患者の發生した時犬神の靈の力で全活する者多く、されば今も新瀉部落の者は氏神として、春秋の祭禮を丁寧に行つてゐます。

## 五人そはへ

此のお話は、今から五六百年ほど前の話であります。

安藝の國に、按摩を業としてゐる、五人の同業の仲のよい盲人がありました。

その盲人達はあちらこちらの國々から集つた者でしたが、同境遇は何時の間にか、五人を兄弟のやうに仲よくしたのであります。

或年の木枯すさぶ正月、五人の連中は、同所に集會して新年宴會を致しました。



犬を追つかく

酒の酔がだん／＼まはるにつれて、よも山の話が出ました。

一人の盲人が、

「どうだ、我々も一生に一度は、信濃の善光寺さんへ、お詣りして死にたいもんじやな？」

と、盲人の悲衰味を口外した。すると外の四人の者は異口同音に、

「人間の一心程強いものはない。古諺に「精神一統何事かならざらん。」といふではないか。盲人であつても、善光寺さんへお詣り出来ないことはない。金さへあれば何處へでも行ける。」

金！ 金！！ 金!!! 金だ!!。

五人は相談の結果、一生の願望である。善光寺詣りを決行すること決議しました。

一年の間は金を得るために、夜晝も一生懸命に働きました。五人の親睦會も少くなりました。

冬の不枯の風も過ぎて、春風暖い時になり、聞くのさへ暑さを増す蟬の聲が、山から聞える時も、何時の間か過ぎ、もの淋しい秋が來ました。

五人の盲人は各々、約束の會合の日を心待にして、元氣よく働いてゐる内に、約束のお正月が來ました。五人の者は昨年やうに。お正月のお祝を初めました。

「どうです。皆さん。お金はたまりましたか。去年の今日の約束は實行出來ますか？」

と、年長者の盲人が言ひますと、

各盲人は、自分自分貯蓄高を發表しました。

全部合ると百兩といふ、大金が出來てゐました。人の力は偉大なものであります。五人の盲人は、「こ

れだけあれば、十分善光寺詣が出来る。」と、小おどりして喜びました。

正月三日の御祝をすましたら、最早く出發することにきめました。

四日目、一般の帆船をやとひました。五人の盲人は、それぞれおちどなく、旅の用意を整へて乗船しました。

彼等五人の喜びを乗せた船は、ろ音も勇ましく頼の港を出帆しました。

風は無し、五人の盲人達は早、善光寺に行つたやうな氣持になり、子供のやうにはしやぎ出しました。

船頭は彼等の様を、異様な眼で視て、時々苦笑をしてゐます。

周圍の景色はわからないが、波の音や、時々聞える鷗の聲などが、耳新らしいものでした。

日が暮れ、夜が明け、出發後、五日目の夕方頃、五人を乗せた船は、直島の北方へさしかゝりました。

そはへ、金！ そはへ、金！ 船頭にむら／＼と悪心が起りました。

突然船は停船

「シマツタ!!」

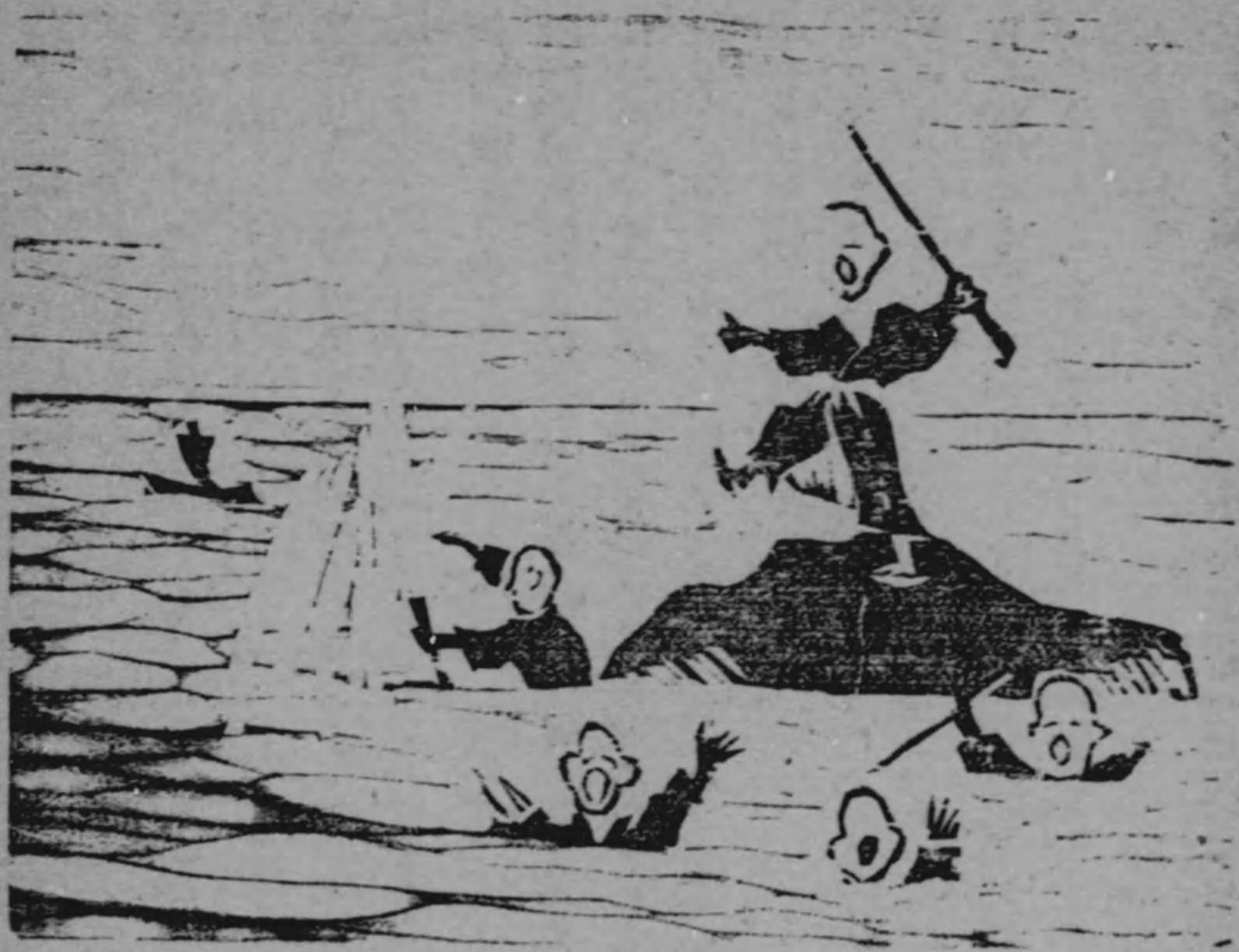
といふ、船頭の叫び、

盲人は開かない目を、ばち／＼させて、船頭の方へ顔をむけ、口早に、

「どうしたんですか？」

と、聲もおぞ／＼尋ねました。

船頭は顔に軽い笑を浮かべながら口調は一寸震しながら、



死の直前の五人盲人

一六

「船がそはへつきあて、何處からか、あかがどんくは入つて來ます。その修理が終るまで、幸丘がありますから、其處へ上つて待つてゐて下さい。」

と、五人の盲人を丘へ上げると、舌を一寸出して、急いで船を沖へ出しました。

五人の者は船頭にあまりせかさされたものだから、澤山金を入れた財布も、荷物も、船に置き忘れました。

そのことに気がついて、

「船頭さん、荷物がぬれてはこまりますから、あげて下さい。」

と言ひました。

此の時には早、舟はその岡を遠く離れてゐました。

いくら呼べど加べど叫がありません。五人の盲人は初めて、計られたことに気が付い

たが時はすでにおそい善光寺詣りの夢消えて、今は狂人のやうになり、走りまはつたが盲目のかなしさどうにも仕方がありませんでした。

盲人のあげられた岡は、海中のそはへであつたのです。時間がたつにしたがつて、潮はどんく満ちて來ました。

足に海水がつかり出しました。潮がどんく高くなるにつれ、

一人流され、二人流され、五人の仲のよい盲人は、別々潮に流され、目的を達せないで、うらみをのんで海底の藻くすと消えました。

其の後、夕方そこを舟が通ると、五つの火の玉がそろつてその岡の上を飛ぶのを見るやうになりました。

雨の夜などは、悲しい泣き叫ぶ聲も聞えなうです。

何時の間にか誰いふとなく、その岩を五人そはへと言ふやうになりました。

今は上烏下烏の兩鳥の間に干潮の時幾百年の波にさらはれたの残影をのこし秋の夜長の、古老の昔語となつてゐます。

## 地藏山の由來

直島の最高峯、地藏山の山名には、左のやうな不可思議な由來がある。

一七

讃岐院の姫君、父君のみあとしたはせ給ひ三宅中務大輔重成と、待女二三人と諸共に船路の旅に出でさ給せふ。

海上御無事に、二十日餘にして、父君居ます待島に着かせ給はる。假屋にて或夜の夢に

「吾は地藏尊なるぞ」

島の西なる楠山に、長く埋れり。

早く堀出し祭られよ。」

言葉終りて御影消ゆ。

はつと姫君驚かれ、しとねの上に座し給ふ。

東の空白む頃

おつきの者に、昨夜の夢を物語。

早く堀り出し祭らせ給へと申せしかば

家來の者はいち早く、

庄屋に命じ、村人集め、

共に御夢の場所にむかはれぬ。

大なる樟の周囲にしめ張らせ、

村人、かはるがはる掘りにしに、

こつと鉄にあたるものあり。

堀り出し見させ給は、こはいかに、

古き石の地藏尊なり。

姫君のみ夢まさしくたかはねば、

祓ひ清めて御祭し、

御山の名をば改名し、

地藏山と申されぬ。

此の後當民も、地藏山と言ふやうになりました。

堀出した石の地藏尊は、今は何處に安置してあるかは不明であります。

### 桃山

小學校の東方一町余の箇所に、高貴の方の塚のやうに、瓢形をした。海拔わづか六十五米ばかりの小山が



地藏尊を掘る



あります。

此の山を島民は桃山と呼んでゐます。

新院、磯の香高い泊が浦の假屋に雨露をしのがせ給ふやうになりましたからは、都のにぎはしさにひきかへ、心を慰めるものは、濱邊に打よす波の音と、木の間にさへする小鳥の啼き聲のみでした。

島民はどうかして、新院の心を少しでもお慰め申さうと、色々相談をしました。其の結果、假屋の後の山へ、桃の木を植へることに決定しました。

あくる日、村主は桃の苗を買ひに行き、村人は山に行つて、植場所をつくりました。

新院は守衛から、此の話をお聞になり、大變お喜びになりました。

千本余の桃は植えられ、其の中に粗末ながらも、真心のこもつたちんが造られました。

あくる年の春には、君を思ふ神のおぼしめしか、早一樹に二三輪づゝ微笑を浮べ花が咲きました。

村人は守衛に色々御願ひをして、新院の觀桃を求めました。守衛も島民の君思ふ純情に動かされ、觀桃を許しました。

新院は隨臣、村主等とちんに座されて、觀桃なされました。非常にお氣に召させ給ひ。

三千年と契りし桃の實を植へて

龜のよはいもまつなこの種

と一首を詠まれました。

其の後も折ふし、桃花をお眺になつて、無慮を慰めてゐました。

かゝる由で、土人は其の山を桃山と呼んでゐます。

今は桃の樹のあとと無く、たゞ言ひ傳へに、昔日の名残をとめてゐます。

## 敬 法 院 (南部恐山の化物退治)

當地法連山に、豊島石の玉垣をめぐらし、苔むした一基の石碑があります。此の碑の地下に永眠する、高僧敬法院に關する化物退治の痛快な物語りがあります。

敬法院さんは、今から百餘年前に、當地磯村茂右衛門氏の家に生れ、全國を遍歴修業なされた方でありま

す。敬法院さんは、幼時當地極樂寺で、お坊さまとしての色々な修業をお積になりましたが、もつとく修業を積みたいとお考になりました。そして眞言宗の總本山である。高野の山へ登り。無量壽院に行つて、行員長海の御師匠さんに隨つて、祕經祕論を研究しました。

其の後、三十才頃備前の國藥師寺の住職になりました。

或雨のしとく降る夜、考へるところがあつて、諸國修業を思ひたちました。

一週間の後、あとを萬事後繼者に頼んで、藥師寺を出發しました。

出發後、諸國を遍歴して、三ヶ月の後、むつの國におはいりになりました。敬法院さんはそれまでに、所

々方々で色々な恐しいことを体験して、心身共に立派な修業が出来てゐました。

野道をすた／＼歩いてゐますと、向の方に大勢の人が集まつて、何か面白い／＼さわいでゐます。

敬法院さんは何か變つたことがあるに異いないと、足を速めて、人々の後で話を聞きました。

「いよ／＼、法連寺敬法院は恐ろしい寺だぞ……。今度のお坊さんで早十人目だ。その十人目が昨日の晩又化物の餌になつてしまつた。可愛相なことだな。」

此の言葉を聞いた敬法院さんは、「は、何か化物が出るかな、よし／＼、わしが退治で、村人に安心をさせてやらう。」と心の中で思ひながら前の人に手をかけて、

「今、後で聞いてゐますと、法連寺とか申す恐い寺があるさうですな。」

此の突然な言葉に驚いたやうに、後ふりむいた一人の百姓らしい男は、敬法院さんを見て、

「へ、お坊さん それは／＼恐い寺ですよ、何人お坊さんが住まれても、生きて還らない不思議な寺ですよ。」

「その寺は遠いですか。」

「いえ／＼、私の村の寺です。それ／＼あそこに……………」

と、村人の指さす方を見れば、紅葉してゐる林の中に、寺の屋根の瓦が少し見えてゐます。

「それでは私が又、其の寺の化物の餌になつて來ませうかな。」

と、平氣で申しました。村人はたゞあつけにとられて、皆の衆は顔を見合すばかりでした。

敬法院さんは村人と別れて、庄屋の宅を訪れ、化物退治の話をしましたら、高僧であることを知らない庄

屋は、

「まあめつそうもないことをおつしやいますな、今までの寺へは、だん／＼えらいお坊さんが貴僧のやうに言つて行かれたが、一人として生還せられた方は御座りません。まあよした方が貴僧の身のためです。悪いことは申しません。」

と、申し聞いて下さいませんでしたが、熱心な敬法院さんの願で、

「そんなに御所望なら行つて見て下さい。」

と、いふことになりました。色々と庄屋の内で諸準備を整へ寺の様子なども委細聞き庄屋を初め村人に送られて、法連山敬法院へむかひました。

山の中腹まで行つた時、敬法院さんは、庄屋を初め村人の方にむかれて、

「皆さん、どうも御見送有難とう御座りました。もしわたしが明朝まで生きてゐましたら、東が白む頃に鐘を三つ合圖に打ちます。其の合圖が聞えましたら、私がまだ生きてゐると思はれて、寺に上つて來て下さい。」

と、頼みました。

村人と別れた敬法院さんは大木の間をだん／＼登つて行きました。

敬法院さんと別れた庄屋や村人は、山を降りながら、

「あの旅僧も氣毒だが、今晚かぎりの命か、何時もあの寺に行く坊様は行きがけは元氣がといが、一晚と

して生きて居る者はない。」

など語りながら、皆それ／＼吾が家へ歸りました。

瓜先上りに二三十分登つた時、話に聞いた恐ろしい寺の門に着きました。

その寺は定住のお坊様がなないものだから、庭には草がほうと／＼繁茂し、家屋も處々崩れ、戸障子は破れて、寺は見るから恐ろしいほど荒廢してゐて、いかにも化物の住家のやうでした。

敬法院さんは、明るい内に一通り寺の様子を見廻はつて、廣間に陣取りました。

いろり火をとろり／＼たきながら、心の中で有難い御經をとへながら、時分を待つてゐました。

夜の更けるにつれて、津輕の海から吹いて來る風は、だん／＼寒さを増して來ます。

いろり火は、とろり／＼

うしみつ頃、今の午前二時頃です。廣間隅の方からコトン／＼と何か物が梯子段を轉げ落ちるやうな音がして來ました。敬法院さんは心の中で、「來たな。」と思ひ、靜かに後をふりむいてイロリの火にすかして音の方を見ますと、廣間の隅の梯子段から、何か一本足の變なものが降りて來てゐます。

その化物は無言のまま、敬法院さんの側へ來て座りました。

よく正体を見ますと、それはさいこ槌の化物でした。正体を見とどけてしまつた敬法院さんは、なほ一心に、有難い眞言のお經を誦へてゐました。

しばらくすると、室外に、ゴーと大きなうなりが聞えだしました。その音がはたと止んだと思ふと、とん／＼と戸をたゞいて、

「ていていこほしはお宿にか。」

と、言ひますと、いろりの側に居るさいこ槌の化物が、

「おはいりなされ。」

と、言つたかと思ふと、

「ご免なされ。」

と、戸も開けないのに、すーと中には入つて來るものがあります。それは馬の首の化物でした。其の化物も又、いろりの側へ來てあたりました。

其の内いろりの火が消えかけましたので、敬法院さんが一本木をくべますと、化物も同じやうに一本づゝくべましたので、火勢が強くなり、天上まで火焰がとゞきさうになりました。

危いので敬法院さんは木を一本引きますと、化物も同じやうに木を一本づゝ引きました。火はもとのやうに消えさうになりましたが、仕方なしにそのまま／＼ほつて置きました。

しばらくたつて、又大きなうなりを立て、戸の外まで來たものがあります。それが前の化物と同じく戸をとんとんとたゞいて、

「てい／＼こほしはお宿にか。」

と、言ひました。

内の二つの化物が口を揃へて、

「おはいりなされ。」



つ四物化と院法敬のたはのりろい

二六

と、言ひました。

「ごめんなされ。」

と、中に入つて来たのは、大きな鯉の化物でした。

敬法院さんは化物はこれくらいかと思つてゐますと、又とん／＼と戸をたゞきます。そして前と同じやうに言つていろいろの側へ来た化物は、鶏の首でした。

敬法院さんは、次にはどんな化物が来るかと待つてゐましたが、いくら待たれても、外は静かで、何の音も聞えません。

「いよ／＼化物はこれだけだな。」と思つてゐますと、外から来た鯉の首と鶏の首の化物が、口を揃へてさいこ槌にむかひ

「御時分はいかゞで御座る。」

と、言ひますと、

「時分はよからう。」

と、申しました。

さいこ槌の合圖で、四つの化物は全部二階へ姿を消しました。

敬法院さんは何をするのだらうと思ひながら、消えかゝつたいろりに二三本木をくべました。しばらくたつて、二階から何か持つて、降りるけはいがします。

近づいたのを見ますと、四つの化物が、うんさ／＼とかいて来たものは、長さが二米もあらうと思ふやうな、大きなまないたの上に、一米もあるかと思はれる、ぴか／＼光つた物凄いでばがすけてあります。それをいろいろのはたに置きました。

さいこ槌が、得意さうに、

「時分はよからう。」

と、言ひました。

敬法院さんも時こそよしと、くべてあつたまきを持つて、不意に、化物の大将と思はれるさいこ槌の頭を力まかせにたゞきました。

不意を喰つたさいこ槌は、びつくりして、ことん／＼と、一本足で二階へ逃げ歸りました。大将が逃げたものだから手下の化物も、

「こけつこ。」

「ひん、ひん。」

二七

「ばちや、ばちや。」

と、言ひながら、それぞれ自分の住家へ逃げて歸りました。

敬法院さんは化物の正體がわかつたので、安心しながらいろいろに木をついで、ゆつくり夜の明けるのを待つてゐました。

一番鶏の聲が聞え、二番三番と鶏の鳴聲が聞えて、空はだん／＼白らんで來ましたので、村人に約束をしてゐた合圖の鐘を、

ゴーン、ゴーン、ゴーン、と三つ撞きました。

村人達はきつと化物に喰はれてゐると思つてゐたのに、約束の合圖の鐘の音が聞えたので、夢ではないかと思ひながら、鎌や、鍬や、竹槍などを持つて、目をこすりながら、庄屋さんの宅へ行きました。

一同は勢揃ひをして寺に行きますと、昨日の旅僧は昨夜一睡もしないのに、少しもつかれた顔色もなく、いろいろの側に座つて御經を誦へてゐました。

その尊い敬法院さんのけだかい御姿を視た村人は、自然に庭に土下座をして頭を下げました。

敬法院さんは村人の方へ靜かに歩みよつて、昨夜の出來事を委細物語りました。

「化物の大將は、昔此の寺を建る時、大工さんが棟に忘れたさいこ槌です。それを取つて來なさい。それから、此の寺の下に池があります。そこに何百年たつたか知れぬ。鯉の主が住んでゐます。その池の横に竹藪があります。その中には馬の首と、鶏の首があります。それ等が夜な夜な、此の廢寺を遊び場所にしておぼれてゐたのです。」

と語つて、庄屋に命じて、それ／＼化物の正體を集めさしました。

村人は庄屋の指圖を受けて、敬法院さんの言はれた處へ行つて見ますと、言はれたとほり化物の正體があります。

敬法院さんは村人が集めた化物の正體を、一所に集めて再びおぼれやうに御經を読み、引導を渡して焼かせました。

敬法院さんの座つて居られた床下から、澤山の人骨が出ました。その骨は、今まで此の寺に住んだ。お坊さまたちの骨であつたのです。それも一所に集められ、御經を讀んでうめました。

其の後敬法院さんは、その寺に四五年生まれ、後繼をつくられて寺を出しました。

村人は僧宥と申してゐた僧名を、寺の名をとつて敬法院と申し、山の名を恐山と言ひ、敬法院さんのお徳を末長くお慕ひすることになりました。

現在も津輕の海に突出した半島中に、恐山と名記してあります、奥羽地方の地圖を開く時だれにも、

「あゝ、あそこか。」

とうなづかれることせう。

## 蚊屋のいらぬ家

三〇

敬法院さんは、薬師寺を出發して直島へ歸りました。

二三ヶ月、極樂寺にて宗門の道を修めてゐましたが、まだまだ身の修養の足りないことを知つて、再び諸國を遍歴しようとした時のことであります。

寺から歸つて來た敬法院さんは、人目をさけるやうに財布の中を調べてゐました。そこへ丁度おふさ婆さんが、

「敬法院さん、食事が出來ました。」

と、室へはいつて來ました。敬法院さんは、驚いたやうに財布の中味調を止めましたが、おふさ婆さんは何時にない敬法院さんの態度に不審をいだいて、

「敬法院さん、今日は財布の中などお調べなされて、どうなさいました。」

「……………」

しばらくして、敬法院さんは、

「婆さん、實はわしもよい年になつたのだが、まだく修業がしてみたくて喃、それにつけても、路金が少々不足なものだから、一寸……………」

敬法院の言葉を聞いて、

「敬法院さん、貴僧ほどの修業を積まれた方が、まだ修業をなされるとは？。」  
と、不審さうに、言ひました。

その言葉に答へて、

「人間は死ぬまでが修業じやから喃。」

此の言葉におふさ婆さん感動さゝれました。

「なるほど、考へてみますれば、貴僧のおつしやるとほり、人間は死ぬまでが修業です。」

「では、私にも路金の一部を工面させていやくませう。」

と、しばらく考へてゐましたが、

「私も、見かけのとほりの貧乏ですが、あれに此の間つくつた蚊帳とふとんがあります。それをはなむけにさしあげませう。」

と、申しました。

けれども、人間であるおふさ婆さんは心の内で、

「土用には蒲團はいらないけれど、蚊張がなくては一夜も安眠することが出來ない。こまつたな。」  
と思ひました。

高僧である敬法院さんは、おふさ婆さんの人間心を透視しまして、

「婆さんのお心さは有難く、愛納致します。そのかはり、眞夏に蚊帳をもらつたら婆さんもさぞこまることだろう、貴女のはなむけのお禮に、此の家だけ蚊ふせして進ぜよう。」

と、申しました。

でも人間心の多いおふさ婆さんには、その事は信じられませんでした。心なくも約束だから、蚊帳を金にかへて敬法院さんは渡しました。

旅支度をなされた敬法院さんは、おふさ婆さんに送られけ波止場まで行きました。

「では婆さん、今から行つて来るよ、五体を大切に……。」

「ではご氣嫌よう。」

「さようなら。」

敬法院さんに乗せた小船は、追風に、波の上をすべるやうに岸を離れました。

おふさ婆さんは名残を惜しむように、何時までもその船を見送つてゐました。

船影が視野から去ると、家に歸つて、敬法院さんの言つたことなど忘れて仕事をしてゐました。

極樂寺の鐘は入りあいを村人につげました。

此の鐘の音を聞いて初めて蚊帳のない、自分のことを考えだしました。早仕事をしてゐるおふさ婆さんを蚊軍は遠慮なしに攻撃を開始しました。

「こまつたな。」

と、思ひながら、家の門をくゞつて、中へは入りました。不思議や、昨夜まで蚊の多かつたおふさ婆さんの家には一匹の蚊もゐません。

此の不思議な現象に初めて、人間心のおふさ婆さんも、心から敬法院さんの、お徳の高いことに敬服やら

感謝をして東をむいて伏しおがみました。

此の事實は、隣から隣へ、村から村へ、大評判となつて廣がりました。

物づきな人々は、此の眞夏に、蚊帳なしに寝られるなど言ひながら、一夜をその家であかす者さえ出来て来ました。

それから百餘年後、明治六年頃まで（現戸主宮武兼太郎氏の五六才まで）蚊がゐなかつたさうです。

宮武氏の七才頃、一二匹づゝ蚊がででしたので、夏蚊屋をつらないと變だと言つて、一度つりましたら、其の後は昔のやうに澤山蚊が出るやうになつたさうです。

今當家には、敬法院さんの所持してゐたと言はれる杖を寶として傳へ持つてゐます。

## 京の女郎の化物

本島を去る五町ほど北の地點に、周圍三町余の、花崗岩で出来た小島があります。此の島名を京の女郎と言つて明治維新頃まで、船人にとつては恐れられてゐた島であります。

昭和の今日では、石屋のみの音がチンカンチンカンと勇ましく聞えてゐます。

物語りは百年程前にかへり、或冬のことです。

直島に二人の仲のよい兄弟がゐました。二人の仕事は魚を沖へつきに行くことでした。

何時ものやうに、沖へ行く支度をした二人は、道具を持つて波止場へ行きました。

陽は西山に入りかゝつてゐます。

船では兄は船頭さんです。弟は一生懸命ろを漕いでゐます。

「兄き 今日は何處へ行くん？」

此の時、寺の入合をつける、鐘の音が聞えました。

「そをだな、林から西廻りをしようか。」

風はないが真冬である。そよ／＼と海上を吹く風は身にしみみます。あたりは眞暗で、青空には星がきら／＼と輝いてゐます。二人の舟が林の岬へ来た時でした。弟が

「兄き、あれは何だい。青赤いへんな火が、高くなつたり低くなつたりしてゐるが？」

兄は夜の海上には馴れてゐるが、此の不思議な火を見るのは初めてでした。

「ほんにな！。おらも長い間沖に出てゐるが、あんな火は初めてだ。」

二人が氣味悪がつてゐる時、海上にあつた火は、山頂を越えて彼方に消えました。

「今日は氣味の悪い日じや。」

と、弟が言ひますと、兄は

「おー。」

と、かるく答へた。

其の内に舟は漁場へ着きました。

明松に点火した。兄はみよしの魚をつく場所に行き、用意は出来ました。

兄は硝子越しに、海底を注視してゐます。

「ひかへ。」

舟は左に廻る。

「そろお／＼さへもつて。」

ざぶんー。静かな海上に音がしました。

「しまった。」

つゞいてざぶん。又、だめでした。

「今日はいよ／＼變だぜ、おせ／＼。」

島を廻つて、京の女郎の近くへ来た時に、東の山の端に三ヶ月が顔を出しました。

「今日は餘り面白なかつた。此處でかゝつて、明日の晝の商賣を此の邊でやらう。」

海にいかりを入れて寝ました。

午前三時頃です。だれか丘から呼ぶ者があります。

仕事にくたびれた二人は、そんなことなどは夢にも知らないで寝てゐました。

何か恐しい夢を見た弟が、目を覺しました。

その弟の耳に、

「舟を者けてくれー。船を着けてくれー。」

と、消え入るやうな口調の、呼び聲が聞えます。不思議に思つたり、恐しかつたので小さな聲で、



「兄き！ 兄き！！ 兄き！！。」

と、兄をゆり起しました。兄は目をこすりながら、

「何じや？、ねむたし。」

弟は兄の大聲を制しながら、

「あの聲を聞いて見。」

兄が、月あかりにすかして丘を見ますと、妖女が巖頭に立つてゐるのが見えました。」

兄は獨語のやうに、

「あゝ、話に聞いた化物じや。」

「二郎、杓の底をぬいて海にほをれ。」

弟は意味不明のまま兄の言つたとほり、杓の底をぬいて海へ投げました。

二人は一生懸命舟を漕いで、其の場を逃げました。本島近くなつたことに気がついた兄は、漕ぐ手を休めてやつと安心しました。

京の女郎島には、昔から次のやうな恐ろしい物語りがあることを、兄は知つてゐたため、弟に杓の底をぬかして海へ投げさせたのです。

此の島は瀬戸内海を航海する船人の、よい給水場でした岩間から湧き出る冷水の味を一度知つた者は、一生忘れることの出来ない程味のよい水です。

或時一艘の帆船が此の島の沖で、潮待をしてゐました。

出帆の際、京の女郎島に立派な水の出ることを聞いてたので、船長は、夜であつたが、二人の船員に命じて水を汲みにやりました。

一時間たつても、二時間たつても歸つて来ません。

船長は不安の一夜を明し、のこりの四五人の船員と島に上陸し、水の出る場所に行きました。

船長初め船員の眠に、惨状がうつりました。それは、昨夜水を汲みに行かした、二人の船員の血にまみれた、死体であります。

船長及び船員は、しばらくぼう然としてゐましたが、我にかへり、命からぐ逃げ歸つたさうです。

又これは別の話ですが、或夜一艘の舟が



兄弟の舟を呼ぶ化物

此の島の沖を通りかゝつた際、島の丘から、

「杓をくれ、一杓をくれ。」

と、呼ぶものがありました。

あまりひつこく呼ぶものですから、舟員は何思はず、古い杓を海の中へ投込みました。今まで静かであつた海上を、水音高く杓を拾ひに来るものは、さう白な顔髪をだらりとたれた女であります。

海の上を歩く不思議な女、此の女こそ、水汲む舟員を殺し、沖行く舟を荒す、化物の正体であります。

其の化物は、杓を拾ふが早いか、舟の中へ海水をつぎこみます。舟員は恐怖をおさへながら、一生懸命に水をかへましたが、化物にはかなひません。

舟は沈み舟員は化物の爲、一人のこらず殺されました。

今も京の女郎と言へば誰の頭にも、恐ろしい島を聯想させます。

明治の大御代に、此の島の化物をふせたと傳へる、此處もまたすめらみことの島根であるから、化物よ住んではいけない、と言ふ意味を書いた。石碑が、巖頭に立つて昔を語つてゐます。

まよけとして將軍の舟などは此の沖を通る時には舟のみよしにこもをつけて通つたといはれます。

附説 此の島の化物は、女郎ぐもなりと言ふ者と、女官の亡靈なりとの二説あり。

## 朝鮮岩

一木一石の持つ名にも昔日偲ばされる事多し。

今は影消えてその名のみこの朝鮮岩、當島東北端の舟で通る時彼の石の由來を小波は語つてくれる。

草深き家に産聲をあげ後天下を平定した豊太公、朝鮮征伐を決意して、天正十九年陽春、沿海諸國に發令して軍艦を急造せしめた。軍艦定泊地を肥前名護屋に決し、軍艦及び軍人は續々當地に集合を急いだ下つて文祿元年三月、太公は大阪城を出發して軍狀視察に名護屋へ下る事となつた。

浪速の港は出發の用意完了して大阪城を出發された豊公は乗員と共に軍船でともづなはとかれた。

播磨灘も順風にまたゞく間に乗り來つて出發後三日目の夕方軍船は直島の東北の所を通りかゝつた、豊公はかねて諸將が參勤交代の通路にて休そくする茶屋の事を思ひ出した。家來に命じて當島に一泊休けいすることにした。

軍舟が岸邊に近づいた時ともづなをとる物がな。

家來は「上様、ともづなをとる場所が見つかり前ません。」との言葉に、元來大を望む豊公は目前にあつた高さ十間圍り六間餘の大岩石を指さして、

「あそこに、よい物があるではないか。」

と言はれて家來は平伏、その岩にともづなをとつた。

炊事係の者達が夕食の酒の肴にきゆうしてゐた時、一艘の漁舟がそこを通りかゝつた。太公はその漁舟を呼

びとめた。魚師は大きな千石舟から呼ぶものだから、いぶかりながら舟を近づけた。太公の眼に舟の中にある見知らぬ魚がついた。

「こりや漁師、その舟の魚はうまいか。」

立派なお武家様とみた漁師は言葉を改めて、

「へー、焼いても、たいてもさしみとしてもどんなにして喰つてもおいしゆ御座ります。」

「何と申す魚じゃ。」

「はい、かつをと申しまして、此の頃は一番相場のよい魚です。」

「なにかつを……」

「はゞ。」

太公の異様なきんちよ振に漁師は何事が起るかと思振しだす。

「それは眞實か。」

「はゞ……。」

太公は獨りごとのやうに、勝王勝王と言つてゐたが、

「えんぎのよい魚だ。舟の魚を皆買ふぞ、いくらだ。」

「へ、一兩でよろしゆ御座ります。」

「よし、」と百兩を漁師の舟になげ入れ、家來に魚を全部本舟に積ませた。

漁師は後で一人夢ではないかと、自分の頬や手をつめつてみたり、百兩の大判を何回も見たが夢でな

い現實だ。

船は早酒もりが初まつてゐるのかうたふ聲、をどる聲が聞える。

太公は一時の後家來と上陸して磯つたひにお茶屋（現在製煉所となつて家なし今の巡航船の着場所位、川越宅には現に當時使用せる茶器を家寶として傳へり）に行き、沖を眺めながらよいさめの茶に、勝王の事を思ひながらきよせられたとか。

その當時軍船をつながれた岩を朝鮮岩と言つて、潮風にさらされながら昔日を物語つてゐたが、明治の初年頃無情にも石工の爲に金とかはり今はたゞ名のみこる。

## 法連山の一おろし

私等の幼少時、お正月のたこあげの時何のことかは知らないで、風が無くてたこがあげられない時、「法連山の一おろし、吹いておくれよ頼みます。」

と、言つたものです。さうすると不思議に、小嵐が吹いて来て、よくたこの上つたことを記憶してゐます。今、本村小學校の北に、小高い丘があつて、松が繁つてゐます。此の森こそ、當島出身の高僧惠法院の永眠の地であります。

屍となつて地下に入るは普通ですが、惠法院は生きながら地下に入られた方です。だから命日も死なれた

日でなく淨に入られた日を、命日としてゐます。惠法院が淨に入られてから、二十何日間か、地下でならすりんの音が、参拜者に聞えたさうです。此の山の名を法連山と言つて、南部の恐山の寺の名をとり、高僧を記念するために村民がつけたのです。こゝで初めて、「法連山の一おろし……」の謎がとけ、惠法院に願ふ、童心を通じて、お徳の高いことの一端が伺はれます。

たこあげの童の言葉には次のやうな不思議な傳説があります。

惠法院さんが恐山の化物を退治して、其の後五年間その寺で住ひ、後繼者をこしらへて故郷に歸る時のこととあります。

村人に送られて下山をし、名残をおしむ村人と別れて船で津輕へ渡らうと考えました。

惠法院さんは相變らす、みすほらしい旅姿をしてゐました。海邊に出た惠法院さんは、一人の漁師に、

「わたし津輕まで渡りたいのじやが、便を下さるまいか。」

みすほらしい僧を視た漁師は、

「あほらしくもない。生くさ坊主を漁舟に乗せたら、明日のまんをそこねるはい。」  
と、すげなくはねつけました。

惠法院さんは仕方なく、次の漁師に頼みますと、

「今日は風が悪いから、舟を出さない心算だ。」  
と、きれいにことはられました。



法連山のーおろし

惠法院さんは是非今日渡らうと思つてゐるのに、誰一人渡さうと言ふ人はありません。

魚と坊主を對照してみれば、無理からぬことですが、惠法院さんは當惑してゐました。

此の時、みすほらしい一人の老漁夫が惠法院さんの側に来て、

「今、向ふで貴僧の様子を見てゐますと是非津輕へ渡りたいやうですが、御觀の通り風も潮も悪いから、今舟に乗られても午前一時頃でないと、向ふ岸へ着きませんぞ、それさへかまはねばお乗りなさい。」

惠法院さんは、地獄でお釋迦さんに會つたやうな氣持になり幾度も禮を言つて、便をもらふことにしました。

老人は岸から舟を出しました。同時に、今まで色々な口上で、惠法院さんの便乗をきらつてゐた漁夫も舟を出しました。

老人の舟はあまり進みません。若衆は後から行つていたが、何時の間にか老人の舟を追ひ越しました。惠法院さんは黙想何事か念じてゐましたが、

「船頭さん、帆を上げなさい。」

船頭は、此の向ふ風にといふかりながら、

「貴僧は舟に心得がないから、とんでもないことをおつしやいます。今帆を上げたら、舟は元の港へ歸ります。」

「いや、心配は御無用。ではせつ僧が帆を……。」

と、船頭の制するのきかないで、帆をあげました。

不思議や、今まで向ひ風であつたのが、法連山から一おろしが来て、舟は白波をけつて、見る間に若衆の舟追ひ越しました。老人は此の不思議な現象にみすばらしい旅僧をみつめるばかりでした。

此の様を視た若衆は、同じく帆をあげました。これ又不思議や、若衆の通つてゐる船路は、以前と同じく逆風で帆をあげると、舟はあとすざりを初めました。

此の時、初めて若衆の心に或ることを感じました、

其の後、誰いふとなしにみすばらしい旅僧が惠法院さんであることを知つた漁師たちは、毎朝沖に出る時には、お詫びのの念佛を誦へて門出をしたと言ひます。

此の南部法連山の一おろしの惠法院さんのお徳の餘惠を求める聲が現今もたこあげする童の間に、

「法連山の一おろし、吹いて下さい頼みます。」

と、言ふ童謡的言葉となつて、傳はつてゐるのです。

## 火つかずの石燈籠

人を救ふために建てた石燈籠が、人を殺した。其の因果か、今に火つかずの燈籠と言つて、林といふ土地濱邊に今なほ毎日濱風にあふられて立つてゐます。

の林の沖を通る舟は口僻のやうに、

「此の岡に目じるしがほしいな。」

と、語らぬ舟はありませんでした。

或冬の大しけの時でした。今のやうに天気豫報などありませんので、天気と思つて、港を出した一艘の船がありました。追風に内海の静かな波の上を走つてゐました。

時間がたつにつれて、天候がだん／＼險惡になつてきました。

陽がとつぶり暮れてしまつた頃、天はいよ／＼荒すさみ、相應じて海も荒れだしました。

あたりは眞暗だし、近くによい港ありませんので、運を天にまかせて、「少し先の直島までやらう。」

と、波にゆられながら船を走らせておました。

海はいよ／＼荒れだしました。

船は直島の近くまで、どうにか逃げて來ましたが、何せ目標がないので、けんとうがつきません。波が高くなつて船は木葉のやうに、もまれたしました。

救を求めましたが、應へるものは、風の音と、荒れくるふ波の音だけでした。

明く日は昨夜のしげにひきかへ、上天氣になつてゐました。林の土地に住んでゐるおとら婆さんは、

「おー、夕べはえらいしげだつた。難破船はできなかつたかなー。」

と獨り言をいひ／＼濱邊へ出ました。

濱邊には夕べの風で、難破した船のかけが澤山、なぎさへうちあげられてあります。

「難船だ!!」

婆さんはあはて、あちらこちら走りまはりました。

向の山根に死人らしいものが見えました。急いで行つて見ると、それは生き得ようと力闘して及ばなかつた船員の屍です。

「可愛そうに。」

と體にさはつてみますと、まだ生暖かいので、婆さんはさつそく藁火をたいて暖めてやりました。

一時計りして、船員は夢からさめたやうに蘇生しました。婆さんは。

「正氣づきましたか、結構結構、でおつれは……。」

と、聞かれた船員は悲しさうに、

「皆、海の中で別れ別れになつてしまひました。」

おとら婆さんはその船員を自分の家に連れ歸り、暖かいものをつくつて喰はせました。元氣づいた船員と色々話してゐる中に、

「昨日も此の丘に明りがあつたら、我々の船は無事であつたものを。」

?と言ふ言葉を聞いたおとら婆さんは胸をうたれました。

「よし、わたしの力で此の濱に燈籠をつけ、多くの船人に便利を與へやう。」

と考へました。

井島の石工に燈籠を注文しました。

旬月で立派な石燈ろが出来て來ました。婆さんは、喜んで其の夜から每晚燈ろに明りをつけました。其の後婆さんは夜が來ると、沖に行く船の中で、

「明がついたので航海がしやしくなつた。」

と喜ぶ聲が聞えるやうな氣がしてうれしがつてゐました。

此の婆さんは佛のやうな心の持主ですが、何の因果か悪い癖が一つありました。それは仕事をしたくなるてばくちばかしうつことでした。

林の濱に、老女が一人任んでゐるのも、由があつたのです。夜になるとばくち連中が山を越えて、婆さんの家でたればかることなくばくちをうつてゐました。

婆さんは勝負に勝つた日には、其のお金で酒を呑んでしまふのでした。一人身の婆さんにとつては、無理からぬことではありますが、これが牛の角をためて牛を殺す原因となつたのです。

燈ろを送つた石屋は盆が来たので、おとら婆さんのところへ金をもらひに來ました。

「婆さん、燈ろの代を取りに來たよ。」

と言はれて、燈ろの代など忘れてゐる婆さんは、

「丁度今工合が悪いが？」

「でも早半年も待つてゐるのに、わしもおまへの金をあてゝ來たのじや。その金がもらへぬと歸つてわしの顔がなくなる。」

と正直な小心者の石工はおろ／＼聲で申しました。

佛のやうな婆さんも金のことになると、心が鬼になつて來ました。

「仕方がなけりや、あの燈ろを持つて歸らつしやれ!!」

石工は燈ろを持つて歸つたとて金になるわけもなく、少し思案をしてゐましたが、

「じや私も一兩だけは是非に入用でな、その金がないと生きてゐられないのじや。」

酒をのんでしまふ。おとら婆さんの財布には、一兩どころか一分の金もありません。

「何と言はれても金は一文もない。」

と財布をはたいて見せました。

石工は悄然と、おとら婆さんの家を出ました。

あてにしてゐた金は一文も手に入らず、このまゝ歸れば借先からせめられる。小心者の彼は途中で身投げしました。其の夜も何時ものやうに、おとら婆さんは燈ろに火をつけました。家へ歸つてふと後をふりむくと、灯は消えて燈ろは墨繪のやうにうす黒く立つてゐます。

「此の風もないのに……」

と、不思議に思ひながら、又火をつけましたが、何時の間か消えてゐます。

其の次の夜も、其の次も、とう／＼今まで立派にあかしがついてゐた燈ろは永久に火がつかなくなりました。

沖行く舟人達も不思議に思ひました。島の漁師も不思議に思ひました。

今 林の濱邊に立つて、苔むしてゐる古い石燈ろには、以上のやうな因縁が結ばれてゐます。

島人は其の石燈ろを名づけて、火つかずの燈ろと呼んでゐます。

## 大 樟

成佛を願ふ極樂寺の鐘樓と並んで、一本の大樟がある。直径一間余、高さは先を切られてゐるので、三四間ばかりだ。木の中はうとろになつて、子供が四五人はいれる。

私も此の樟を友達にして遊んだものですが、今も子供のよい遊び屋となつてゐる。

雨が降つても雨は漏らす、入口はあるし、木のつじは少し廣くなつて遊ぶことも出来る。いくらあばれて

も叱る人は無く、此の木の中こそ子供の天國である。

或る日、何時のやうに大勢の子供が集つて、まゝごとをして遊んでゐた。そこへ白衣の神職さんが石段を上つて來た。大勢の子供は全部木の中から出て、

「神かんさん、今日は。」

神職は子供達を見て、

「みんな偉いな、仲よく遊びなさいよ。」

子供達は賞められて、得意になり、

「神官さん、今日も何か話してよ？」

神職はにこ／＼笑ひながら、

「よし／＼。神さまのお禮がすんでから。」

「じゃ、僕たちも一緒におまわりしませうか。」

「それはよいことじゃ。日本は神の國ですから、神さんは大切にせねばならぬ。」

こんな問答の後、神職と子供は氏神さまへ上つて行つた。

神まさにお禮をすました神職は、

「何を話ませうか？」

「何でもよろしい。」

「では今皆さんが遊んでゐた。樟の話をしてあげませう。」

「あの樟には何か由があるのですか。」

「あるとも、あるとも、今から話ませう。」

「皆さんはお大師さんをよく知つてゐるでせう。そのお大師さんは、日本中を遍歴して、澤山の人を助けたり、悪い心の人を善くしたり、池を作つたり、それは／＼日本のお國として、大切なお坊さんです。皆さんの毎日遊んでゐる樟は、そのお坊さんが直島へ來られた時、記念に植えられた樹です。」

子供達は初めて知つた毎日友達にしてゐる樟の由來、神職はなほ話を續けた。

「お大師さまの植えられた樟は、年々大きくなつて來ました。何十年、何百年するうちに、樟の大切なところが忘れられてしまひました。樟は所かまはずはびこつて、神さまへお詣する者のじやまをしだしました。或日のこと、村人と庄屋と相談して、その樟を切りたほすことになりました。」

四五人の人夫はかまや、鋸や、繩を持つて、其處へ行きました。大人の三かゝへもあるやうな大木、それに大師の靈がこもつてゐます故、何となしに切ることが恐ろしい氣がしました。

けれども元氣を出して枝を切り落しました。木こりは腰をすへて根本から、ごしり／＼と切り初めました。其の日の夕方、やつと切りたほすことが出來ましたので、樹のつじだけ切落し、人夫はそれ／＼我が家へ歸りました。

明る日、五人の人夫は落合ひました。其の時、一人の人夫が「僕は夕べ變な夢をみたよ、昨日やつと切りたほしたあの樟が、何時の間にか前のやうに立つてゐるのじゃ。」

わたしもおまへと同じ夢を見ました。



四人の者はいよ／＼氣味悪るがる。樟の側へ行つて四人の者は腰をぬかしてしまひました。昨日きりたほしたはずの樟が、夢の通り立つてゐます。四人は口を揃へて救を求めました。丁度其處へ庄屋が見廻に來て、四人のたゞならぬ有様に、

「どうなさつた。」

「庄屋さん、あの樟はお化物です。昨日私が庄屋さんに傳へたやうに、切りたほしてゐたのがあのとほり立つてゐるのです。」

庄屋は少し不思議に思つたが、又新しい四人の人夫を出しました。此の四人も昨日の人夫と同じめにあひました。

庄屋はいよ／＼うたがふことが出來ないので、何か靈木に異ひないと、色々調査をしたところ、弘法大師のお手植の樟であることがわかり、其の後でいちやうにしました。」

こゝで神職の話はすんだ、子供は始めて靈木のいはれを知りました。

### きびしやうがだけ

直島に昔から「夜家の外に出て髪をとかんもん」と言ひ傳へてゐます。

今を去る百年前、おしやのといふ一人者の老女が居ました。人間は初めから悪心はありません。おしやの婆も若い時は何不自由なく暮してゐましたが、打續く不幸に夫をうばはれ、子供も自然の悪手にうばはれ

てしまひました。

年はよるし、日々のの生活にさへ困難を感じるやうになりました。でも日本人です。神詣りは何時も念頭に持つてゐました。

或る年の雨あがり時期に、漁師の便をもらつて金比羅まわりをしました。

汽車も電車もない昔、丸龜の港に舟を着けて、腰辨當で舟人達金比羅山へ行きました。

石段の兩端の色々な御土産物。懐中無一文の彼女になをさら色々な品が目につきます。時々は店の前に立ち止まつて品物をいじつてみますが、断念したらしく石段を登るのでした。

本社の前、澤山の參詣人があります。婆さんもお米だけなげうや／＼しくおがみました。

頭を上げて前を見ますと、一枚小判がさんぜんと光をはなつてゐます。

婆様は、懐中無一文、御土産物、小判、と心の中で走馬燈の如く描きました。

白髪の頭を左右に廻して見ますと、幸か不幸か今まで澤山居た參拜人は居ません。自分だけ最前から同一場所に座してゐることに氣がつかしました。

しほかれた手はソツト小判へ、此の時繪馬堂の方へ行つて居た船頭が歸つて來て、まだ神前に居るおさの婆さんに、

「婆さん信心なな、もういぬぞ。」

おさの婆さんは、何んだか心のふるへるのを感じました。でも返す勇氣もなく、そのまま船頭衆と山を下りました。下では船頭衆はめい／＼酒を一杯やる、土産を買ふ、愉快さうである。

婆さんも何時の間にか神前のふるいを忘れて、皆の衆に續いて酒屋には入つた。一杯、二杯元氣は満身した。店を出しなに小判を一枚、それを見た船頭衆は、

「婆さん、景氣がいゝな—」

酒に元氣を得てゐる婆さんは、

「ふん、小判、大判が何んだ。」

と、一寸豪語したが、言つた後の彼女の心は暗かつた。

賑やかかりし濱邊も淋しくなり正月が近くなつて來た。何處にも此處にも餅つくきぬの音が寒空に響きだした。おふさ婆さんも、小判ののこりで何時もになく澤山のもちをつきました。

今まで賑やかであつたおさの婆の家は靜かになつた。

時々北風が木の梢にあたる音が婆さんには氣味悪く聞える。

「あゝ、これでお正月の用意も出來た、髪でもところ。」と獨語をいひながら家の外へ出た。

外は眞暗、空の星は婆さんに何事かを語る如く、きら／＼と輝いてゐる。

髪にくしをあてゝゐる時でした。山手の方に何か物凄いな音がした。此の時婆さんは「アツ—」と言つたきり何處へかすがたが消えてしまひました。

その翌朝、近所の者が用事に行つたが婆さんはゐません。門口に髪の手入道具がころがつてゐるばかりです。其の後おさの婆さんのおらなくなつたことが村中に傳はりました。

婆さんは何處へ？

或る日男木の者が舟に乗つて直島へ來てゐました。直島近くなつたので船頭は山の方をみると何だか變な物がかげの木にあるのが見えました。

舟が岸についてから、そのことを村人に話すと人々は好奇心をいだいてきびしよがだけに行きました。

船頭の眼についたものこそ、慘たるおさの婆さん最後のすがたでした。

その後、誰の口から出たか、てんぐん様にさらはれたのだと、

今にきびしよがたけと言へばおしやの婆さんの異變を聯想します。

## 琴弾地の濱

琴の音に通ひしうらみ忘れ貝

拾ひし昔おもほゆるかな

三ヶ月形孤形の濱數町、後に小高い丘陵濱は緑の松原、國立公園の特別區域暑夏は近郷の海水浴客一日を樂しみ賑ふ濱、濱の縁起を知るや知らずや。由來を知りて初めて情緒いやが上にもます。

現に島人は五反地と言ふ。昔此の谷に田が五反あつたとか、讃岐院當地に遷らせ給ひしより、琴弾地の濱と言ふ此の濱の名の起原これには床しい物語りを浦吹く風が秘めてゐる。

讃岐院の御詠に

松山や松の浦風ふきこして

とある如く、讃岐院は淋しさを此の濱にお遊び給はれて貝などを拾はせ給ひ、都のかなしさを御忘れになつてゐた。潮は遠く干て、廣い潟に讃岐院を初め、おつきの者は我を忘れて、貝をお拾ひになつてゐる。一つ、二つ、三つ、大きな名も知れぬ貝が籠の中に視る視るたまる。

此の時、浦風に交りてたへなる琴の音が、何處から聞へるともなく讃岐院のお耳に入り給ふ。

今まで無我の境になり給ひ、一心に貝を拾ひ給ひし讃岐院は、貝拾ふ手を休め給ひ、しばしその美音を聞召給ひしが、何時の間にか感移り給ひだん／＼琴の音に引かれ、その音のする方へ歩ませ給ふ、

おつきの者がふと気がつくとき、讃岐院の御姿が見えない。驚いて主の御姿を見まはると、白砂の彼方に讃岐院の歩ませ給ふ御姿が見えた。おつきの者は胸とどろかせ後を追ひながら、

「讃岐院さま／＼、いかがなされました。」と申せば、

讃岐院は立とまり給ひ供奉の者ともの方をかへりみ給ふて、無言のまま、琴の音のする方を指さし、又静かに歩ませ給ふ。供奉の者も心得たりと足早に讃岐院の後に従ふ。松下の清砂の上に座し、琴の音の主の近くに來給ひし讃岐院は、龍顔うるはしくにつこり笑せられ給ひ、

「おゝ、姫か、何時來られた？」

姫もなつかしさを顔面にたゞへ、

「供奉の者から讃岐院さまが此の濱に貝をお拾に來られたと聞き、私も何かよいおなぐさめはないかと都より持參致した琴を持つて參じました。」

「なか／＼上手じゃや喃。」

姫は顔を袖でおほひ、

「ほほ、おはづかしい。聞きおぼへで御座ります。御樂しみのお邪魔をして恐縮に存じます。」

「いや／＼今の音は何とも申せぬ……。」

姫は内心御ほめの言葉に心のやく動を制しつゝ、

「もう潮干狩はお止めあそばされましたか。」

「いや、止めた由ではないが。」

「では、お拾ひあそばせ。」

「今一曲弾じられては？」

「御意なれば。」

と姫は濱に置かれた琴を取あげ、三つの指を動かし初めた。弾く姫も聞く讃岐院初め供奉の者もこうこつとして別世界に遊ぶ思ひである。

一時の後琴の音は、はたと止んだ。

「心おほへのまゝで失禮致しました。」

と讃岐院の方を見て軽く頭をさげる、龍顔いよ／＼うるはしく、

「お蔭で久方振で氣が晴々した。」

再び潮干狩をなさつた潟を見た時、何時しか潮は瀉をうめてゐる。浦風は軽らく松の梢をかすめて過ぎた。

御詠から此の濱の無名の貝の名を忘れ貝と言ひ、松風にえいりようをなぐさめ給ひしより琴弾地の濱と申すやうになつた。

今のこる王道は、讃岐院が泊が浦の御假屋より此の濱に御通なさはれし道であるとか。

## 波無の浦

琴弾地を東に廻つた浦を島民は波無の浦なみなしの浦と言つてゐる。新院（讃岐院のことを島民新院と申し奉つた）琴弾地の後で沖の景色などを賞で、東の岬を廻られて假屋へ歸つてゐた時の事であります。

向の島根には多くの小舟が釣をしてゐます。

新院はしばし岩に腰をかせ給ひ、釣漁する様を御観になつてゐました時、

一天俄かにかき曇り、大暴風雨となつて、今まで平和に釣をしてゐました小舟は、不意をくつて如何ともする術もなく、波間に生死の境を漂ふて、一時は無我無中に舟をあやつてゐますが自然の悪成には勝てずたゞ運を天にまかせました。

小舟は波間に漂ふ木の葉の如く自由を失つてしまつた。此の有様を御覽じ給ひし新院は、漁夫達を不便と思召し給はれ、波のしぶきに身を清め、大暴風雨の中に不動立となり給はれ。これ海神のたゞりならんと合掌めいもく御祈願をなされました。「海神漁人に如何なる罪とかがあらうとも我にめんじて御心をなぐさめ海を静め給はれ。」主体は潮にぬれ給ひしもかへりみづ、しばし無念無想の新帝、一時の後目を開き給

へば今まで天海和しく荒れくるつてゐた海上は、不思議や前の平穩に復して、釣人は九死に一生を得た喜びを顔面に現し、夢めかとはかり喜び金比羅大権現と祈りし手を初めてとききました。此の釣人の喜が様を御覽なされ給ひし新院は自がことのやうにお喜び給ひ、再び海神にお禮の祈をなされました。島人新院の民を思ふ心に感激して、末長く新院の御徳を偲ぶため、此の濱を波無の浦と語り傳へるやうになりました。

## 素 麵 川

崇徳宮から一町程てまへに、總長二間、幅七、八寸の鈎なりの川がある。年中冷水が流れてかれた時がない此の小川に名をなつたか？、それには深い由がある。

大小を腰に、箱根八里を馬や徒歩で、越してゐた時代のことである。

「今日は！」

色の黒い漁師らしい男が、南の寺に行つて、案内を乞ふ。奥から六十四五をも過ぎたと思はれる、院家様おちつき顔に出て来る。

「誰かと思つたら作さんかい、何か……」

院家さんの言葉の終らぬまに、

「院家さん今日は、よいお天気で、今日は俺の爺さんの二十年期をしますから、御苦勞を願ひます。」

「承知しました。」

色の黒い作さんの家では、親類の老婆達が澤山集まつて雑談に花をさかせながら、法事の御馳走をしてゐる。うまさうな素麺が一鉢山のやうにもられた。

「その素麺は誰が喰ふのじゃ！」

「こればかり南寺の院家さんが、一人で喰ふは。」

院家さんの素麺好は、島中の評判になつてゐた。

其の日の夕方院家さんは一人で寺を出た。

村を過ぎ山道を五六町通つて石段を下りると、濱邊に二三十軒家がある。此の部落が法事の案内を受けた積浦である。

「今日は、爺さんの法會が出来まして……………」

「遠方御苦勞さまでした。どうぞ。」

座敷に通され、一服茶をよばれ、ぼつ／＼祖塔婆を書いて、

佛壇に向つた院家さんは、有難さうに一しきり經文をあげた。

おつとめの終んだ後で、又お茶を一服。其の内にお膳の用意が出来た。

院家さんを上座に、親類の者四五名が相手役に座つた。

「院家さん、俺ら座りつけないから、御無禮します。」

とあぐらをかく。

酒は血官を巡り初めた。

院家さんのわんには何時も素麺がない。給事人が氣をきかして入れかへる。話しながらべろりと喰つてしまふ。御馳走支度の婆さんの話に異はず、一人で素麺を喰つて知らぬ顔をしてゐる。

半時ばかり御馳走になつた院家さんは、

「あゝ、大變御馳走になつた。これで失禮します。」

と、歸る支度にかゝる。

「まあよろしいが院家さん、まだ早いですよ。」

「いや、十分御馳走になつた。」

「では、提灯持を誰か……………」

「いや／＼、一人で氣まかせに歸る、誰もこなくてよろしい。」

と、提灯を借りて、濱風に鼻歌をやりながら歸りだした。

石段を上つてお宮の前へ來た時、前に一人の僧がある。院家さんは、不思議だな——と思ひながらも、酒のおかげで氣が大きくなつてゐるものだから、とん着しないで其の前を通り過ぎた。

ところが其の僧は何も言はないで、後について來る。院家さんは少し氣味が悪くなつて、一寸と立止まると其の僧も止る。走れば同じく走る。

その内に風もないのに提灯の明が消えた。

ふと前を見ると、暗の中に何か大きな大木のやうなものが立つてゐる。星明りにすかして見ると、それは

恐ろしい爪のはえた毛だらけの獣の手らしい。

いくら大膽不敵の院家さんも、これには膽をつぶして一目さんに逃げだした。

大きな怪物の手は、どつこいとばかり院家さんをつかんで、大きな爪をぶつすり腹へたてた。

腹からは鮮血と共に、御馳走になつた素麺が、だら／＼と地上に流れた。

怪物は一聲、あやしげな叫び聲をたて、その素麺を近くの小川に持つて行き、水にすゝいでうまさうに喰つた。

明る日、寺男は院家さんの歸らぬことを心配して早朝お迎へに行つた。

その途中小川の近くに院家さんの惨死の姿を視た。小川には怪物の喰ひのこしの素麺が少しのこつてゐる

其の後、誰いふとなく、小川を素麺川といひ、夜おそく其處を通らなくなつた。

又素麺を喰つた後には、かならず湯茶をのむことが流行した。それは湯茶をのむことによつて、喰つた麵類を溶すからださうである。したがつて魔よけになるとか？

素麺川の名の起りし異説

此の川にて、崇徳院にさしあげるめん類を冷したために此の名が起りしとか？

## 観音の井

平氏全盛時代、鹿谷事件の發覺は、當時の人々に大きな衝動を與えた。

當時天下を我が物の如く心得て居た、清盛は非常な立腹であつた。

西光法師の首が飛んだ。成親が生ながら地獄の責めを受た。成親の子成経は、死なぬばかり泣き悲しむ若

い妻から引き離されて、備前の兒島へ流されて行つた。

此の陰謀の宿を提供した俊寛僧都、其の席で興に乗じて平氏を徳利あつかいにして躍つた平康頼、此の二人は薩摩がた鬼界が島へ流されることになつた。

清盛はどう考へたか、成経をも二人の道連に加えた。

成経は此の時二十を餘り越えてゐなかつた。俊寛は三十六歳、康頼は最も年長者であつたが、年は明らかでない。

治承元年六月中旬。

黒染の衣にやつれた二人と、狩衣努袴の若い一人が、消え入るばかりの悲しい思を胸に包んで、數人の領送使に守られて、備中の國、瀬尾の港から船を出し、鬼界が島へ送られる事になつた。

領送使も無言。三人も無言。三人を乗せた船は、瀬尾の村を後に沖へ進む。

狩衣姿の成経は、國の妻のことを安じてか、故郷へ走る雲を無心に眺めてゐる。其の様を見た俊寛は成経を不思議に思ひ、

「成経殿。何事も運命じや、死なれたと思ひあきらめなされ、何時か又許される時もあらうに！」

此のなくさめ言葉もひにくに、自が一人島にとりのこされることを豫知せぬ。俊寛こそ哀れである。

船は島々の間をぬつて進む。

早天に一同は渴をおぼへた。康頼は領送便に

「のぞがかはいて仕方がない。此の岡に船を着けて水を求めては……。」  
領送便も同じくのがかはいてゐたので、水を求めることになつた。

此の島こそ直島の宮の浦である。

太陽はかん／＼と照つてゐる。島民は見知らぬ都人を異なりと見守つてゐる。

「手近に水はござらぬか。」

都人の言葉は通じかねて、島人は何か異變でも起るのではないかと、恐れて逃げてしまふ。

野井戸を見れば、何れも水枯れて一滴もなく引きかへさんとする。

俊寛はしばらく無言で立つてゐたが、口で何事か唱へながら、衣をめくり濱の砂を掘り初めた。一尺も掘らぬ間に清水がこん／＼と湧き出た。

一同は地獄で佛に會つた心地して、心ゆくまで渴をいし、一同喜びながら船に引き歸したが、後寛は一人後につこり、頸に掛けし一寸八分の黄金の観音像をとりはずし掌中にのせ、

「我が願成就し、清水出づ、此の如く我の罪も何時しか晴れて京に歸るべし。其の時まで御像を此の井戸の中にあづく許されて京に歸る時まで我を待たれよ。」

と、井戸の中に像を納めた。

船では俊寛の歸りがおそいので、不審をいただき迎をおこす。

此の時俊寛は船へ急いでゐた。

井戸の中では黄金の観音像がさんと光をはなしてゐる。

明る日村人が濱に来て見ると、此の早天に清水の湧き出でゐる所がある。不思議に思ひながら中を注視すると、何か物がびか／＼光つてゐる物がある。

けれども村人は不思議な井戸、不思議な物として誰一人手をつける者がない。

此の不思議な井戸を掘つた人が、俊寛僧都であることも誰も知らない。

餘り深くはないが井戸の水は汲めども汲めどもつきぬ。

観音像を井戸に納め、自分の歸京を守らせと念じた効なく、俊寛は赦免なく鬼界が島で一人情死した。

其の後年ふるにつれて、不思議な光の主は砂にうもれて一つの傳としてのこつてゐた。

それから二百餘年後、此の不思議な話を備前の國日比來願寺の住職が耳にして來島した。

その井戸を改めて見れば、傳に異はず土に埋れてゐた観音像が出た。それを持ち歸らんとしたが不思議やわづか一寸八分の像をのせただけで船は少しも動きません。僧は此不思議に打たれてしばし啞然としてゐたが、合掌して口中で何か呪文をとへると船は濱邊を離れて日比の方に動き出した。

其の後、その井戸を僧都井又は観音井と言ふ。

今は井戸はないが、昔日を偲ぶかのやうに、宮の浦竹林計助氏宅の隅に一つの祠を立て、昔のおもかげをとゞめてゐる。

## 直島民謡

## 琴弾小唄

六六

一、沖は大漁か しるしが見える

ヨホイヤ ヨホイヤ

濱じや主待つ娘たち

二、白砂千里よ 緑松は萬里

ヨホイヤ ヨホイヤ

琴の浦風客を待つ

三、保元偲ぶは 泊がの浦よ

ヨホイヤ ヨホイヤ

打寄す波はかへりやせぬ

四、眞帆や片帆で 沖行く船に

ヨホイヤ ヨホイヤ

島のかのこが手でまねく

はやしは、島の網船が大漁をした時、しるしを立て、元氣よく歸へる時のかけ聲であります

一、月は三日月木蔭は暗く

サ、とさゝやく聲低し

渚うつ波岸をかむ

エートドツコイ船頭が歸る

二、おかみのぞくなうぶ娘

浴着着たのをはにかみつ

雄波こい／＼手まねきす

エートドツコイ船頭が歸る

三、ダンス踊るか一人はいやよ

波にあはしてステツプふめば

ステーヂさく／＼波は笑む

エートドツコイ船頭が歸る

以上十五六の島の傳説を書きましたが、これで總べてがつきたわけではありませんが、ひまがとれませんので、又餘暇が出来れば追補する考へてゐます。

以上の傳説を一讀下され、島の傳説のアウトラインでも得て下されば私の光榮とするところであります。

秋雨降る昭和八年十月三日稿を終る



## 直島民謡

## 琴弾小唄

一、沖は大漁か 　しるしが見える

ヨホイヤ 　ヨホイヤ―

濱じや主待つ娘たち

二、白砂千里よ 　緑松は萬里

ヨホイヤ 　ヨホイヤ―

琴の浦風客を待つ

三、保元偲ぶは 　泊がの浦よ

ヨホイヤ 　ヨホイヤ―

打寄す波はかへりやせぬ

四、眞帆や片帆で 　沖行く船に

ヨホイヤ 　ヨホイヤ―

島のかのこが手でまねく

はやしは、島の網船が大漁をした時、しるしを

立て、元氣よく歸へる時のかけ聲であります

一、月は三日月木陰は暗く

サ、とさゝやく聲低し

渚うつ波岸をかむ

エ―トドツコイ船頭が歸る

二、おかみのぞくなうぶ娘

浴着着たのをはにかみつ

雄波こい／＼手まねきす

エ―トドツコイ船頭が歸る

三、ダンス踊るか一人はいやよ

波にあはしてステツプふめば

ステ―ヂざく／＼波は笑む

エ―トドツコイ船頭が歸る

以上十五六の島の傳説を書きましたが、これで總べてがつきたわけではありませんが、ひまがとれませんので、又餘暇が出来れば追補する考へてゐます。

以上の傳説を一讀下され、島の傳説のアウトラインでも得て下されば私の光榮とするところであります。

秋雨降る昭和八年十月三日稿を終る

昭和十一年七月三十日 印刷  
昭和十一年八月五日 發行

非賣品

著作者 三宅勝太郎  
香川縣香川郡直島村

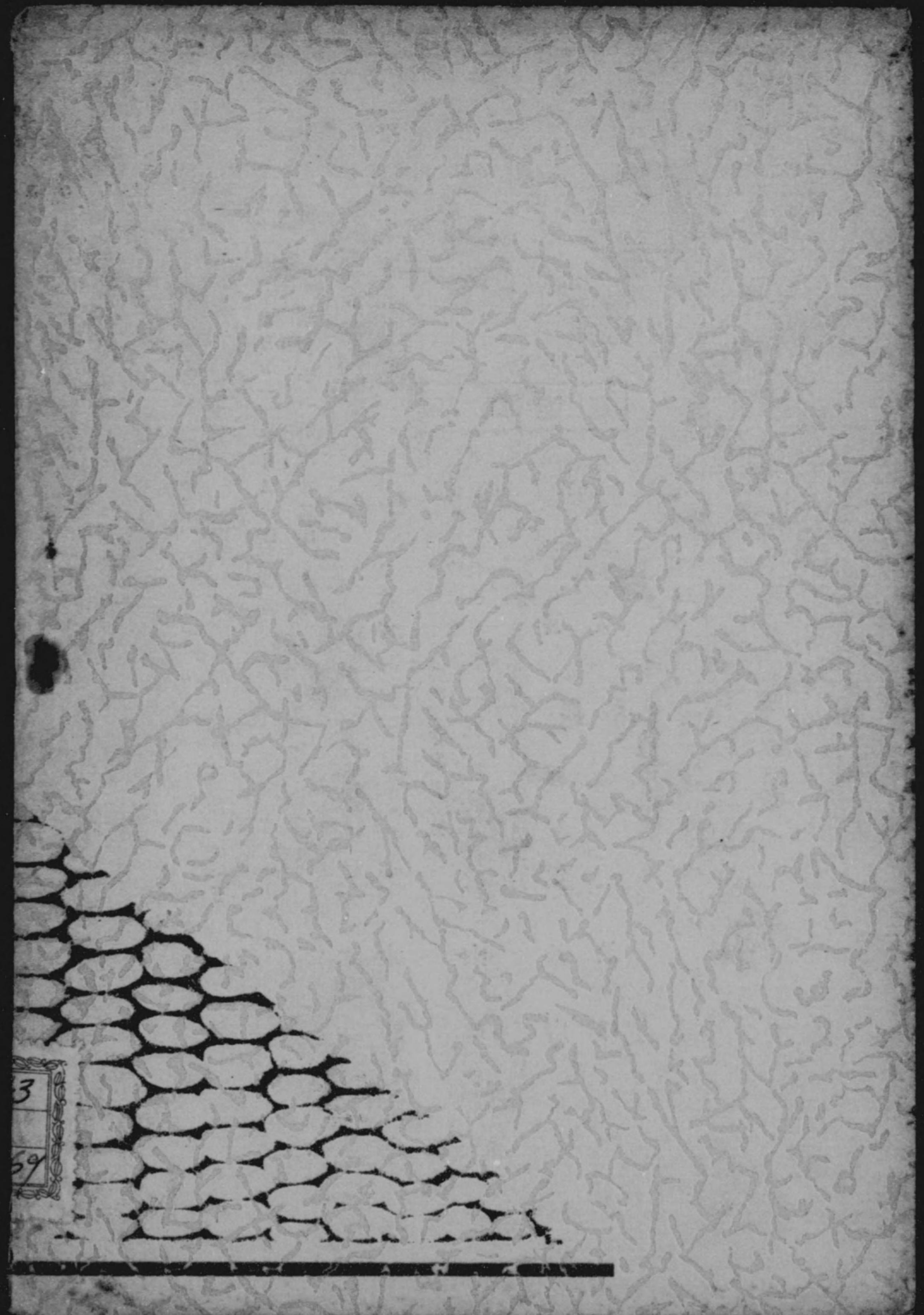
發行者 辰亥政太郎  
香川縣香川郡直島村

印刷所 會社 原文具店  
香川縣高松市西新通町八六

印刷人 齋藤茂治郎

發行所 香川縣香川郡直島村  
琴彈地海水浴場

不許複製



3  
69